無気力と無力感
― 動機の期待×価値理論からの分析 ―

高山草二

Soji TAKAYAMA

Apathy and heplessness
―An analysis based on expectancy×value theory of motivation ―

要　約

大学生の意欲の低下として、無気力と無力感を同時に取り上げ、それぞれ「価値の喪失」と「期待の欠如」として期待×価値理論の枠組みから位置づけ、検証を行った。大学生が捉えている無気力を調べたところ、「目標喪失」「快感情の欠如」「行動停滞」「身体的不調」の４因子がみられた。これら無気力の因子は、「価値の喪失」を認知、感情、行動、身体の側面からとらえたものであり、期待×価値理論に基づく「価値の喪失」としての無気力という仮説を支持するものである。また、無気力と無力感（絶望感）の２つは、領域別（授業、学業、大学）の意欲低下に対し独立の寄与を示し、同じ意欲の低下であっても、独自の性質を持つことが検証された。文化的自己観との関係を調べたところ、その一つ「相互協調性」は無気力の４因子のすべてと関係していたが、無力感とは全く関係はみられず、両者の性質の差異と無気力の文化的バイアスを示唆する結果であった。「相互独立性」は無気力の４因子に加え、無力感に対して負の関係がみられた。「相互独立性」は動機づけ全般に強力な要因としてはたらいている。無気力の４因子に基づいてクラスター分析をしたところ、４因子とも高いタイプが２割みられ、「目標喪失」のみが高いタイプや「身体的不調」と「行動停滞」が高いタイプなど、多様な無気力の類型が確認された。

【キーワード：無気力，無力感，期待×価値理論，文化的自己観】

はじめに

学習において決定的な要因の一つは学ぶ意欲、動機づけであり、この問題に関しては多くの研究がなされてきた。ただ、現実としては、動機づけのタイプや特徴の検討よりは、学ぶ意欲がなかなか湧かないという、動機の欠如の方がむしろ切実な問題であろう。

このような動機の欠如に関する重要な知見が学習性無力感理論である。これは、自分の行動と結果に随伴性がないという認知、つまり非随伴性の認知によって動機の欠如が生ずるとしている（Seligman, 1975）。つまり、行動がある結果に結びついているという期待が失われることが、やる気の減少を招くと考えられる。その後、人間への適用に際して改訂学習性無力感理論へ発展し、無力感を抑うつとみなし、原因の帰属と素因としての帰属スタイルの重要性を明らかにした（Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978。そして最終的には、絶望感理論が提案され、絶望感が抑うつの予測因とされた（Abramson, Metalsky, & Alloy, 1989）。

無力感に関しては研究がかなり発展しているといえよう。日本でも、「無気力」というタイトルがついているが、内容としてはこの学習性無力感を扱った研究書がいくつか出版されている。（波多野・稲垣,1981; 宮田,1991; 水口, 1985 ; 桜井, 1995）

しかし、意欲の減退に関しては、もう一つの研究の流れがある。それは、先述の本のタイトルで使用されている無気力やスチューデント・アパシーの研究である。

真面目な男子大学生が、ある時から急に授業に出なくなり、学業に関する意欲を失い、試験を受けない状態が慢性化してしまい、留年、退学に至る場合がある。Walters（1961）が最初に、アメリカの学生の症例に対して、スチューデント・アパシーと命名した。

その後、アメリカにおける研究は消えてしまうが、日本では多くの症例がみられ,日本独特の青年期の障害と考えられている（笠原, 1984, 1988;下山, 1996）。下山（1995b）は臨床例から、「悩まない」行動障害、「悩めない」心理障害、「自立適応強迫」性格からなる３次元構造モデルを提案している。悩めない心理としては、「自分のなさ」「張りのなさ」「実感のなさ」の３つがあるとしている。しかし、一般学生のアパシー傾向に関しても無気力という用語を用いて検討されてきたが、実証的な研究は少ない。

ところで、これら２種類の意欲の低下は互いにどのような関係にあり、動機づけ理論からはどのように捉えられるのだろうか。この点に関し、従来の動機づけの理論における、意欲の低下の検討は十分とは言い難い。

＊　島根大学育学部心理・発達臨床講座

たとえば、自己決定理論の中では、動機づけの失われた状態として、動機欠如（amotivation）を設定しているが（Ryan & Deci, 2000）、内容としては様々なことをコントロールできないという認知であり、学習生無力感に近いものである。しかし、自律性の連続体上に位置づけられる、「内発的動機づけ」「同一化的調整」「取入れ的調整」「外的調整」などと、この「動機欠如」の関係はあまり明確ではない。行動の調整が内的にも外的にも失われた状態を指すのだが、なぜ無力感に類似したものを想定するのか疑問である。

また、目標理論においては、意欲の低下にかかわる目標が提案されており、課題回避（work avoidance）という目標を設定する場合や（Duda & Nicholls, 1992）、表面志向などの目標が取り上げられてきた（Ainley,1993）。しかし、目標理論から動機の低下を考える時、課題回避など、特定の目標の設定ではなく、目標自体の喪失を想定することも可能であろう。

ところで、今まで動機づけに関しては様々理論が提案されてきた。その一つに動機づけを期待という観点から捉える理論がみられる。Rotter（1966）は統制の位置（locus of control）の概念を重視したが、これは、行動と結果の随伴性に関する期待を表している。Bandura（1977）は２つの期待として効力期待（自己効力感）と結果期待を考え、動機づけとしての働きを検討している。Skinner, Caapman & Baltes（1988）は３つの統制に関する信念、すなわち期待を取り上げ、より精緻な理論を展開している。

もう一つの重要な動機づけの理論は価値を重視するものである。一般に、われわれは欲求や人格、社会的要請などに基づいて、何が望ましいかということに関する信念を形成している。このような主観的価値づけを動機の基本とするのである（Feather, 1990）。

先に述べた目標理論は、達成目標の分析を中心としており、個人が採用する達成目標が動機づけとして重要であるとしている（Dweck, 1986 ; Ames, 1992; Nichols, 1984）。目標理論はどのような達成目標に価値を置くかということを検討しているのであり、この意味で価値にかかわる動機づけの理論として分類できよう。

しかし、動機づけをよりトータルに捉えようとするならば、期待の側面と価値の側面をともに取入れた「期待×価値理論」が最も妥当な枠組みを与えてくれる。基本的立場としての期待×価値理論は、現在も継続して研究されている（Atkinson,1964 ; Pintrich. 1989 ; Wigfield & Eccles, 2000）

自己決定理論が扱う内発的動機づけと外発的動機づけについいても、行動それ自体が価値をもつことや、行動がある結果に対して手段としての価値をもつと考えるならば、期待×価値理論の枠組み内に位置づけるとこができる（Pekrun, 1993）。

この様に、動機の包括的な理論として期待×価値理論を取り上げた時、先に述べた２つの意欲低下、無力感と無気力をこの理論の中に位置づけることが可能である。期待×価値理論では、意欲の低下は単一の要因ではなく、少なくとも「期待の欠如」と「価値の喪失」の２つの要因が考えられる。「期待の欠如」は従来、学習性無力感として研究されてきたものである。そして「価値の喪失」または目標の喪失は無気力として研究されてきたものに対応すると考えられる。この様に捉えると、動機の欠如、意欲低下として独立に検討されてきた問題と動機の理論を統一的に扱うことが出来る。特に、無気力は価値や目標の喪失に基づく意欲の低下という側面が考えられるのである。この価値喪失としての無気力という考え方の妥当性を検証することが本研究の目的の一つである。

無気力は価値にかかわる概念であるのに対し、無力感は期待にかかわる概念と考えられる。目標喪失などは「何をやったらいいかわからない」「やるべきことがみつからない」ということであり、期待の欠如による無力感の「何をやってもだめだ」ということとは全く異なっている。期待×価値理論の枠組みによれば、２つの意欲低下を期待と価値の喪失と言う観点から区別して、検討することが可能になる。

下山のアパシーの心理は価値の喪失に近いと考えることもできる。「自分のなさ」は自分の内的欲求を意識できない、内的欲求が希薄、など価値の喪失、目標の喪失とみることもできる。「実感のなさ」も生き生きとした感情がなく、ものごとに興味や意欲がわかない状態である。期待×価値理論では、価値の一つとして感情を捉えており、「実感のなさ」も価値の喪失といえるかもしれない。しかし、アパシーの心理はあくまでも臨床レベルの無気力に関して提案されたものであり、一般学生の無気力ついてさらに詳細に調べる必要があろう。

無気力に関しては事例的な研究は多いが（稲村, 1988; 深谷, 1990）、実証的研究は少ない。そのなかでも従来の無気力の尺度は、理論的な観点から作成されており、現実の無気力を表しているか疑問が残る。

下山（1995a）は、先にふれた「自分のなさ」「張りのなさ」「実感のなさ」を測定する尺度を作成し、これが非臨床レベルの一般の大学生の意欲の低下に影響することを示した。しかし、この尺度はあくまでも臨床的な事例から導かれたアパシーのモデルに基づくものである。

下坂（2001）は中学生、高校生、大学生に共通の無気力感の尺度を作成したが、生活感情の研究に基づいて、対自的要因、対人的要因、時間的展望の要因の３つの側面から項目を作成している。笠井・村松・保坂・三浦（1995）も小中学生を対象にして、理論的に設定した内容に関して尺度を構成している。

そこで、本研究では、一般学生の無気力の内容を研究者側から理論的に設定するのではなく、大学生自身が捉えている無気力を質的に調べることによって、ボトムアップに無気力の尺度を構成する。これにより、価値や目標の喪失としての無気力という捉え方を検証したい。

鉄島（1993）は一般学生の無気力について、授業からの退却、学業からの退却、大学生活からの退却の３つの下位尺度からなる尺度を作成している。ただしこの尺度

は結果として、無気力というよりは意欲の低下を領域別に行動レベルで測定するものと考えられる。本研究においては、下山（1995a）と同様、行動レベルで領域別の意欲の低下を調べる尺度として使用する。

本研究では期待×価値理論に基づいて、領域別の意欲低下に対して、無気力（価値の喪失）と無力感（期待の喪失）を同時に取り上げ、これら２つが行動レベルの意欲低下に独自の寄与を示すことを確認する。

ところで、スチューデント・アパシーは日本の大学生に特有の現象であるという。この問題を考えるとき手がかりになるのは、先に述べたアパシーに関する3次元構造モデルである。このモデルでは、性格の次元として「自立適応強迫」を取り上げている。特に、性格の特徴として、受動的適応性があり、場の期待に合わせる、期待されることを先取りして行動する、そして他者の気持ちをくむことに優れているなどを指摘している。

さらに、「悩めない」心理障害の「自分のなさ」は自分の欲求を意識できない、周囲の期待に合わせようとするなどの傾向をもつとしている。

これらの性格特性や心理は、文化的自己観の問題として論じられてきた、日本文化に特有の「相互協調性」に通じるところがある。東（1994）は日本人の「気持ち主義」の存在を示している。

文化的自己観とは文化において歴史的に共有されている人間観または「自己」の捉え方である。Marcus & Kitayama（1991）は、このような自己観として「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」の２つをあげている。前者は自己を他者と分離した独自の実体と捉えるものであり、西欧に典型的にみられる。後者は、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己をとらえるものであり、日本およびアジア文化に一般的である。これら２つの自己観により、認知、感情、動機づけなどの心理過程が大きく異なるという。文化的自己観は社会的表象であるが、これが個人の自己認識へ反映され、個人の「相互独立性」「相互協調性」を形成すると考えられ、これらを測定する尺度がいくつか構成されている（高田, 1999 など）。

日本文化でその傾向が強い「相互協調性」は、アパシーの心理や性格特徴に関係しており、その結果、日本においてアパシーが多くなるのかもしれない。臨床レベルのアパシーと一般学生の無気力に、ある程度連続性を想定できるなら（土川, 1990）、一般学生の無気力と「相互協調性」に関係がみられるはずである。そこで、文化的自己観として、「相互協調性」と「相互独立性」を測定し、これらと無気力との関係を調べる。しかし、もう一つの意欲低下である無力感は、特に日本文化特有とは考えられておらず、「相互協調性」とは関係がみられないはずである。

最後に、無気力にいくつかの側面がみられるなら、これらに基づく類型がどのようなものかも検討したい。これにより具体的に無気力のタイプを確認できるはずである。

方　法

被験者

国立大学学生446人であり、男性は174人、女性は272人であった。学年では1回生が175人、3回生が231人で全体の91%を占める。

尺　度

無気力尺度　予備調査として大学生145人に対して、「無気力」とはどのようなものか、どのようなとき「無気力」になるか、と言う質問に関して自由に記述してもらった。

自由記述内容を分類した結果、「目標喪失」（自分は何がしたいのか分からない）、「快感情の欠如」（心から楽しいと感じることがない）、「身体的不調」（毎日の生活のリズムが不規則である）、「おっくう」（いろいろなことが面倒くさく思える）の４つに分けられた。これらの内容を表す項目を自由記述を参考にして30項目作成し、無気力尺度とした。各項目に対して「当てはまらない」から「当てはまる」までの５段階評定を求めた。

領域別の意欲低下尺度　鉄島（1993）の作成した尺度に関して、下山（1995）が簡略化したものを使用した。授業、学業、大学それぞれからの退却を表す項目を5項目ずつ、合計15項目の尺度である。主に、各領域における具体的な行動について評価していることが特徴である。各項目に対して「当てはまらない」から「当てはまる」までの５段階評定を求めた。

絶望感尺度　高比良（1998）によって作成された「拡張版ホープレスネス尺度」日本語版を使用した。本尺度は「ネガティブな結果の予期」と「無力感の予期」の２つの「予期」または「期待」を測定するものである。絶望感は無力感の最終的な理論である絶望感理論において、抑うつの十分条件とされたものであり、ここでは無力感の指標として用いた（Abramson et al., 1989）。

「拡張版ホープレスネス尺度」は対人領域20項目、達成領域20項目、領域を特定しない20項目、合計60項目からなるが、このうち領域を特定しない20項目を用いた。この下位尺度は対人領域、達成領域の下位尺度に対して、相関が.76、.81と非常に高く、妥当性の検討（抑うつ、自尊感情、達成動機との相関）においても全く同等であった。元の尺度では「はい」「いいえ」の２件法であったが、本測定では各項目に対して「当てはまらない」から「当てはまる」までの５段階評定を求めた。

文化的自己観尺度　高田（1999）の作成した尺度を用いた。「相互独立性」10項目、「相互協調性」10項目、合計20項目の尺度である。各項目に対して「全く当てはまらない」から「ぴったり当てはまる」までの７段階評定を求めた。

手続き

調査は集団で行い、無気力尺度、文化的自己観尺度、領域別意欲低下尺度、絶望感尺度の順で回答してもらった。調査日時は2002年7月であった。

結果と考察

各尺度の分析

無気力尺度　無気力尺度30項目に関して、主成分分析と斜交回転（オブリミン法）を行い、解釈可能性を検討した結果、４因子解を採用した（表１）。第1因子は「私は生き生きとした生活を送っている」や「心から楽しいと感じることがない」などの項目が含まれており、「快感情の欠如」とした。第２因子は「毎日の生活のリズムが不規則である」「私はいつも体がだるいと感じる」などの内容であり、「身体的不調」と解釈できる。

第３因子は「私には明確に定まった目標がある」「自分が本当は何がしたいのかわからない」など目標がみつからないという内容であり、「目標喪失」とした。最後の因子は集中できない、ボーとして時間が過ぎてゆく、身体が動かない感じなど、おっくうさを示しており、「行動停滞」とした。

「目標喪失」はまさに価値の喪失の認知面を表してる。「快感情の欠如」は「何に対しても興味・関心がわかない」など、価値づけるものがないことと、それに伴う生き生きとした感情の欠如を表している。これらの身体と行動への表われが「身体的不調」と「行動停滞」と考えられる。

無気力の４因子は「価値の喪失」を認知、感情、行動、

表１　無気力尺度の因子分析

項　　目	因子１	因子２	因子３	因子４
29. 私は生き生きとした生活を送っている。	－.668	－.182	－.132	－.041
17. 私には熱心になれるものがない。	.665	.014	.280	.041
11. 学生生活は楽しいことでいっぱいである。	－.654	－.162	.022	.180
5. 私は情熱を持って打ち込めるものを持っている。	－.647	.013	－.343	.185
3. 心から楽しいと感じることがない。	.646	.025	－.102	.071
28. 何に対しても興味や関心がわかない。	.617	－.115	－.078	.345
13. 私は今、手ごたえを感じるものがみつからない。	.585	－.037	.274	.064
15. 最近、満足感や達成感を味わっていない。	.575	.017	－.060	.185
26. 毎日が変化のない単調な日々である。	.447	－.100	.053	.386
18. 私は何事に対しても積極的である。	－.365	－.079	－.200	－.058
22. 何かを自発的に行うということがない。	.364	－.119	.250	.321
8. 朝はすがすがしく、爽快な気分で起きられる。	－.123	－.636	－.033	.097
12. 毎日の生活のリズムが不規則である。	－.239	.580	.093	.101
16. 私はいつも体がだるいと感じる。	.176	.573	－.131	.241
4. 体の調子はいつも良い方である。	－.350	－.551	.038	.272
6. いろいろなことが面倒くさく思える。	－.077	.477	.142	.434
20. 私は日々の生活で疲れを感じている。	.240	.444	－.186	.247
2. 何かをすることが面倒なため実行しないことがよくある。	－.171	.407	.262	.352
1. 私には明確に定まった目標がある。	－.202	.024	－.769	.048
25. 私は将来の夢に向かって努力している。	－.076	－.151	－.714	－.095
21. 自分が本当は何がしたいのかわからない。	.049	.130	.551	.314
30. 何も目的や目標がなく、毎日をだらだらと過ごしている。	.358	－.031	.442	.353
9. 自分でやりたいことがなく、周りに流されるままに行動している。	.279	－.140	.384	.354
7. 私はまわりの事柄に対してあまり感情が動かない。	.350	.079	－.382	.263
24. 何かすべきことがあっても集中できない。	.041	.046	.018	.647
19. 何もしないで時間がただ過ぎてゆくという感じがする。	.230	－.179	.193	.604
23. 私はボーッとしていることが多い。	－.068	.133	.078	.570
10. 何かをやろうとしても、体が動かない感じがする。	.061	.279	－.049	.554
27. 毎日の生活で脱力感を感じている。	.445	.127	－.073	.449
14. いろいろなことがどうでもいいと感じられる。	.262	.268	.069	.439
説明分散	6.933	3.483	3.777	5.855

表２　絶望感尺度の因子分析

項　　目	主成分
1. 将来に、強い期待と熱意を抱いている。	-.548
2. 物事がうまく行かない時でも、そのうちうまくいくようになると思うので、楽観でいられる。	-.436
3. もし、私がやろうとすれば、自分にとって本当に重要なことはやり遂げられるだろう。	-.476
4. 私の将来は暗いと思う。	.749
5. 私は本当に運が悪く、将来よくなるとも思えない。	.691
6. 将来は、楽しいことよりもむしろ不愉快なことばかりだ。	.698
7. 将来のことを考えると、今と同じかあるいは今以上に幸せだろうと思う。	-.602
8. 将来、本当に満足することなどほとんどありえない。	.666
9. 不愉快な目にあうよりも楽しい目にあう方を期待できる。	-.616
10. 物事を自分にとってより良くすることに関して、私にできることは何もないので、あきらめた方がいいかもしれない。	.621
11. 将来、人生はうまくいくだろう。	-.666
12. 物事はたいていうまく行くので、人生において私が大切に思うものは、ほとんど手に入る。	-.367
13. 私は、人生で最高の物を失ってしまい、この先も事態はよくならないだろう。	.598
14. 本当に欲しいものは手に入らないと思う。	.555
15. 将来、最も関心のある分野で成功するだろう。	-.409
16. 物事は、私が望むようには行かないだろう。	.540
17. 本当に欲しいものは、決して手に入らないだろう。	.605
18. 将来が、私にとってよくなる見込みはあまりないように思う。	.803
19. 私は将来にとても自信を持っている。	-.606
20. 望むものを手に入れようとしても、私には多分無理だろうから、やってもむだである。	.644
説明分散	7.310

身体の側面から捉えていると考えられ、期待×価値理論に基づく、価値の喪失としての無気力という仮説を支持するものである。これら無気力には、期待の欠如の側面は全くみられず、無力感とは明確に異なるものである。

２つ以上の因子に高い負荷をもつ項目は除外して、各因子の項目の平均値を算出して下位尺度の値とした。信頼性（α係数）は「快感情の欠如」.870、「身体的不調」.719、「目標喪失」.825、「行動停滞」.747と十分高いものであった。

４つの下位尺度のどれにも、性別、性別と学年（１回生対３回生）の交互作用は有意ではなかった。しかし、「目標喪失」において学年差がみられ、３回生の方が高かった（F（1,402）=13.83, p<.001）。

本研究における一般学生の無気力の内容が、臨床例から抽出されたアパシーの心理障害と類似していた。「味気ない」は「快感情の欠如」に、「自分がない」は「目標喪失」に「張りがない」は「身体的不調」や「行動の停滞」にそれぞれ対応している。このことは、臨床レベルンのアパシーと一般学生の無気力が、全く異質なものというよりは、むしろ連続的であることを示唆している。しかし、アパシーは男子大学生に多いのに対し、本研究における無気力に性差はみられず、今後の検討が必要である。

絶望感尺度　絶望感尺度20項目を因子分析したところ、固有値は第１主成分が7.31（36.6%）、第２主成分が1.62（8.1%）となり、一因子構造がみられた。表２に項目と第一主成分の値を示した。どの項目も十分な負荷を示しているので、20項目の平均値を絶望感尺度の値とした。信頼性はα=.902であり、十分な値が得られた。

「絶望感」との相関は、「快感情の欠如」が最も大きく（.661）、次いで「目標喪失」（.490）が大きかった。「行動の停滞」とも中程度の相関がみられ（.379）、「身体的不調」とは最も低い相関であった（.267）。これらの相関はすべてで有意であった（p < .001）。

性別と学年の効果を検討したところ、学年、学年と性別の交互作用は有意でないが、性差が有意であり（F（1,402）=7.09, p<.01）、絶望感は男性の方が女性よりも高かった。

領域別の意欲低下尺度　領域別の意欲低下尺度について、主成分分析を行い、斜交回転を行った結果、下山（1995）と同様の３因子解が得られた。それぞれ、「授業からの退却」「学業からの退却」「大学からの退却」と解釈した。各因子に含まれる項目も下山の結果と同じであり、これらの平均値を算出した。信頼性（α係数）は順番に、.752、.697、.746であり、十分な値が得られた。

「授業からの退却」には性差と学年差が有意であり、男性の方が女性より高く（F（1,402）=11.75, p<.001）、３回生が１回生よりも高かった（F（1,402）=10.42, p<.001）。「大学からの退却」には性差はみられないが、３回生が１回生より高かった（F（1,402）=8.37, p<.01）。

「学業からの退却」には性差、学年差ともみられない。交互作用は３尺度とも全くみられなかった。

文化的自己観　文化的自己観尺度について、主成分分析を行い、斜交回転を行った結果、高田（1999）と同様の２因子解が得られた。それぞれ、「相互独立性」と「相互協調性」を表しており、因子に含まれる項目の平均値を算出して下位尺度値とした。信頼性（α係数）は、「相互独立性」が.789、「相互協調性」が..800であり、十分信頼できる値であった。

これら２つの下位尺度間の相関は-.418であり、中程度の負の関係が得られた。２つ下位尺度の平均値を比較すると、「相互協調性」の方が「相互独立性」よりも高かった（4.86と4.11、t（446）=11.88, p＜001）。性差、学年差、交互作用は全くみられなかった。

無気力と絶望感の領域別退却への影響

無気力の４下位尺度と絶望感を説明変量、授業、学業、大学からの退却を目的変量とする重回帰分析を行った（表３）。

「授業からの退却」に対しては、「身体的不調」が最も強い正の寄与を示し、「目標喪失」も正の有意な寄与を示した。「快感情の欠如」と「絶望感」はともに負の寄与を示した。無気力、無力感が強いほど、むしろ授業に良く出るという傾向を示している。この現象は下山（1995）においても、「味気なさ」の因子に関して示されている。授業を少しはさぼる方が充実感が高いのである。土川（1990）は一般学生のアパシー化の前状態として、「強迫的授業出席」がみられることを指摘している。

「学業からの退却」に関しては、「目標喪失」が最も強い正の寄与を示し、「身体的不調」「行動の停滞」も弱いながらも正の寄与を示した。しかし、「快感情の欠如」と「絶望感」の寄与は有意ではなかった。

「大学からの退却」に対しては、「快感情の欠如」が最も大きな正の影響を示し、「絶望感」も正の寄与を示した。しかし、「目標喪失」「身体的不調」「行動の停滞」の寄与は有意ではなかった。この結果は、「学業からの退却」の場合と対照的である。

「授業からの退却」と「大学からの退却」の２つの領域において、「絶望感」と無気力の４下位尺度とは独立の寄与を示しており、無気力は期待に基づくやる気の無さとは独立な側面であることを示唆する。　絶望感に由来する意欲の低下は、授業や学業のレベルではなく大学からの退却という、かなり重大なレベルにかかわるといえよう。

表３　領域別意欲低下尺度を目的変量、無気力と絶望感を説明変量とする重回帰分析

	授業からの退却	学業からの退却	大学からの退却
快感情欠如	－.175 **	.097	.515 ***
身体的不調	.405 ***	.105 *	.069
目標喪失	.213 ***	.330 ***	.005
行動停滞	.158 **	.143 *	.052
絶望感	－.126 *	－.027	.147 ***
R	.518	.546	.679
F (5,440)	32.22 ***	37.30 ***	75.35 ***

+ p < .10, * p < .05, ** p< .01, *** p < .001

文化的自己観と無気力、絶望感、退却との関係

文化的自己観の２尺度を説明変量、無気力４尺度、絶望感、領域別意欲低下３尺度のそれぞれを目的変量とする重回帰分析を行った。結果を表４に示した。

無気力の４下位尺度に関しては、「相互協調性」はすべて有意な正の寄与を示した。「相互独立性」は「身体的不調」の有意傾向（p=.058）以外はすべて有意な負の寄与を示した。「相互協調性」は無気力感を増加させるが、「相互独立性」はこれを抑制する。　これに対し、「絶望感」については「相互独立性」のみが強い負の寄与を示したが、「相互協調性」は有意な寄与を全く示さなかった。「相互独立性」が低いことが絶望感を促進するが、「相互協調性」は無関係であった。

領域別の行動に関しては「相互協調性」はすべて有意な寄与はみられないが、「相互独立性」は「学業からの退却」と「大学からの退却」に有意な負の寄与を示した。「相互独立性」は、授業からの退却と比べより重大な、学業や大学からの退却を抑制するが、協調性は無関係であった。

表４　無気力、絶望感、領域別意欲低下を目的変量、文化的自己観を説明変量とする重回帰分析

	相互協調性	相互独立性	R	F値(2,443)
快感情欠如	.103 *	－.360 ***	.413	45.66 ***
身体的不調	.138 *	－.097 +	.200	9.19 ***
目標喪失	.107 *	－.389 ***	.444	54.42 ***
行動停滞	.242 ***	－.203 ***	.375	36.29 ***
絶望感	－.061	－.412 ***	.390	39.80 ***
授業からの退却	－.052	.023	.065	0.95
学業からの退却	－.057	－.318 ***	.298	21.64 ***
大学からの退却	－.050	－.226 ***	.210	10.26 ***

+ p < .10, * p < .05, ** p< .01, *** p < .001

文化的自己観は無気力と絶望感に対して異なる関係を示す。「相互独立性」は無気力感と絶望感の両者を抑制するのに対し、「相互協調性」は無気力を助長するが絶望感には関与していない。この点において、価値の喪失に基づく無気力と期待の欠如に基づく絶望感とは性質が異なており、期待×価値理論に基づく捉え方を支持するものである。

「相互独立性」は無気力を抑制する。この抑制的な働きは絶望感や学業・大学からの退却に対してもみられる。逆に言えば、「相互独立性」の欠如は無気力はもとより、絶望感、退却などを助長するのである。

無気力に関してのみ、「相互協調性」という日本的文化の特性が関与していた。スチューデント・アパシーは日本の大学生に特有の現象とされるが、一般学生の無気力においても「相互協調性」が関与しており、日本文化に特有の側面が関与している。

類型の分析

無気力の４下位尺度に基づいて、Ward法によるクラスター分析を行った所、解釈可能な５クラスターが得られた（表５）。

第１クラスターは141人（31.6%）が含まれており、「身体的不調」と「行動停滞」が相対的に高かった。「身体的不調・行動停滞」タイプと解釈しておく。ただし、値の大きい「身体的不調」と「行動停滞」の尺度でも3.5程度であり、それほど大きな値ではない。

第２クラスターは他のクラスターよりも４下位尺度すべてにおいて値が高く、無気力の最も強いタイプであった。このクラスターには94人（21.1%）が属しており、「全般的無気力」タイプと考えた。

第３クラスターは70人（15.7%）が含まれており、４下位尺度のどれもが２から３前後の範囲に入っており、特に高くも低くも無い。いわば「平均的」タイプといえよう。

第４クラスターは４下位尺度のすべてがどのクラスターよりも低く、89人（20.0%）が属していた。このクラスターは「全般的無気力」の丁度正反対のタイプであり、「高意欲」タイプとした。

第５クラスターは、「目標喪失」のみが非常に高く、その他の３尺度は３前後と平均的な値を示していた。このクラスターには52人（11.7%）属しており、「目標喪失」タイプと解釈した。

無気力にも多様なタイプが存在しており、「全般的無気力」「目標喪失」「身体的不調・行動停滞」の３種類が確認された。

男女の割合は類型に関しては異ならなかった（χ^2=4.29, p=.368）。しかし学年差がみられ（χ^2=11.6,p<.05）、「高意欲」タイプは１回生で多く、「目標喪失」タイプは３回生に多かった。

類型と文化的自己観、領域別意欲低下、絶望感

５クラスターにおける文化的自己観、領域別意欲低下尺度、絶望感の比較を行った（表５）。無気力のタイプに応じて、「相互協調性」と「相互独立性」が一貫して変化している。「全般的無気力」タイプは他のタイプよりは「相互協調性」が有意に高く、「相互独立性」は有意に低かった。

逆に「高意欲」タイプは他のタイプよりは「相互協調性」が有意に低く、「相互独立性」は有意に高かった。「高意欲」タイプは「相互協調性」と「相互独立性」がほとんど同じであるのに対し、「全般的無気力」タイプは「相互協調性」が「相互独立性」よりもかなり高かった（1.5の差）。

類型の分析からも、無気力に対する文化的自己観の影響が明確になったといえよう。「全般的無気力」は領域別の意欲低下や絶望感が強いが、このような学生が約２割みられるのである。

領域別意欲低下の３領域と絶望感で、「高意欲」タイプは最も低く、「全般的無気力」は最も高かった。その他のタイプはこれらの中間に位置するが、「目標喪失」群は授業からの退却以外で、「全般的無気力」に次いで高い。

表５　５クラスターにおける無気力、絶望感、領域別意欲低下、文化的自己観の比較

	クラスター1			クラスター2			クラスター3			クラスター4			クラスター5			
	平均値		SD	平均値		SD	平均値		SD	平均値		SD	平均値		SD	F(4,441)
快感情欠如	2.64	bc	.477	3.61	d	.543	2.46	b	.358	1.83	a	.418	3.10	c	.473	183.23
身体的不調	3.53	c	.481	3.93	d	.519	3.13	b	.350	2.72	a	.698	2.91	ab	.534	76.37
目標喪失	2.68	b	.558	3.73	c	.644	2.71	b	.430	1.67	a	.491	3.70	c	.471	208.10
行動の停滞	3.46	d	.429	4.03	e	.487	2.56	b	.299	2.13	a	.631	2.97	c	.546	213.95
絶望感	2.54	b	.518	2.91	c	.589	2.50	b	.517	2.07	a	.489	2.72	bc	.438	31.59
授業からの退却	2.84	bc	.858	3.10	c	1.036	2.50	a	.841	2.12	a	.832	2.51	b	.900	16.10
学業からの退却	3.19	bc	.626	3.60	d	.659	3.04	b	.692	2.51	a	.749	3.34	c	.690	31.80
大学からの退却	2.59	bc	.710	3.26	d	.720	2.44	b	.587	1.87	a	.689	2.78	c	.708	48.55
相互協調性	4.96	bc	.698	5.18	c	.857	4.65	ab	.696	4.52	a	.792	4.86	bc	.656	10.73
相互独立性	4.16	b	.710	3.66	a	.744	4.10	b	.697	4.64	a	.775	3.91	ab	.655	22.10

異なるアルファベットは有意差を、同一のアルファベットは有意差なしを示す（Tukey法）。全体の分散分析のＦはすべてp < .001で有意。

まとめ

一般の大学生の無気力として、「快感情の欠如」「身体的不調」「目標喪失」「行動停滞」がみられた。これらは無気力の４つの因子は、いわば「価値の喪失」を認知、感情、行動、身体の側面からとらえたものと考えられる。期待×価値理論における「価値の欠如」としての無気力という仮説を支持するものである。

「価値の欠如」としての無気力と「期待の欠如」としての無力感(絶望感）は領域別の意欲低下に対し、独立の寄与を示した。これらは動機の欠如としては性質が異なり、それぞれが独自に意欲の低下を招くことが確認された。

「相互協調性」は無気力の４因子のすべてと関係していたが、絶望感とは全く関係はみられず、仮説が確認された。無気力の文化的バイアスを示唆する結果である。「相互独立性」は無気力４因子、絶望感、領域別意欲低下の３尺度すべてに負の関係がみられた。「相互独立性」は動機づけ全般に強力な要因としてはたらいている。

無気力の４因子に基づいてクラスター分析を行ったところ、５つの類型が得られた。無気力傾向がみられる３つのタイプ、「全般的無気力」「目標喪失」「身体的不調・行動停滞」と、「平均的」タイプと全体に意欲の高い「高意欲」タイプである。無気力傾向の最も強い「全般的無気力」タイプは約２割存在し、領域別意欲低下も最も著しく、「相互協調性」が最も高く、「相互独立性」が最も低かった。それに対し、「高意欲」タイプは領域別意欲低下がほとんどみられず、「相互協調性」が最も低く、「相互独立性」が最も高かった。文化的自己観と無気力の関係性は、無気力の類型を通しても確認されたといえよう。

同じ意欲の低下であっても、無気力と無力感ではその対処の方法が異なっている。無力感の場合、期待の欠如の背景をなす帰属スタイルの修正などの働きかけが有効である（Dweck, 1975など)。しかし、無気力の場合、本研究で示したように、本質的には価値の喪失に由来するので、同じ意欲の低下であっても無力感への対処方法は有効ではなく、価値の回復への援助が必要になる。

高山（2001）において、文化的自己観は学習動機と関係することが示されている。文化的自己観が無気力・無力感とも密接に関係するという本知見も含めて、統合的な理解が今後の課題である。

文 献

Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy, L. B. 1989 Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, **96**, 358-372.

Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. 1978 Learned helplessness in humans : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.

Ainley（1993）Styles of engagement with learning: Multidimensional assessment of their relationship with strategy use and school achievement. *Journal. of Educational Psychology*, **85**, 395-405.

Ames, C. 1992 Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 261-271.

Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, N. J : D. VanNostrad.

東洋 1994 日本人のしつけと教育―発達の日米比較にもとづいて　東京大学出版会

Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Duda, J. L., & Nicholls, J. G. 1992 Dimension of achievement motivation in schoolwork and sport. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 290-299.

Dweck, C. S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674-685.

Dweck, C. S. 1986 Motivation processes affecting learning. *American Psychologist*, **41**, 1040-1048.

Feather, N. T. 1990 Bridging the gap between values and actions. In E.T. Higgins & R. M. Sorrentino（Eds.）*Handbook of motivation and cognition*, Vol. 2. The Guilford Press.

波多野誼余夫・稲垣佳世子 1981　無気力の心理学―やりがいの条件―中央公論社

稲村　博 1988　若者・アパシーの時代　―急増する無気力とその背景　日本放送出版協会

笠井孝久・村松健司・保坂亨・三浦香苗 1995　小学生・中学生の無気力感とその関連要因　教育心理学研究, **43**, 424-435.

笠原　嘉 1984　アパシー・シンドローム　―高学歴社会の青年心理―　岩波書店

笠原　嘉 1988　退却神経症　―無気力・無関心・無快楽の克服―　講談社

深谷昌志 1990　無気力化する子どもたち　日本放送出版協会

Marcus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications of cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

宮田加久子 1991　無気力のメカニズム　―その予防と克服のために―　誠信書房

水口祀治 1985　無気力からの脱出　福村出版

Nicholls, J. G. 1984 Achievement motivation: Conception of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, **91**, 328-346.

Pekrun, R. H. 1993 Facets of adolescents' academic motivation: A longitudinal expectacy-value approach. In M. L. Maehr, & P.R. Pintrich（Eds.）*Advances in Motivation and Achievement*, Vol.8, 139-189. JAI Press Inc.

Pintrich, P. R. 1989 The Dynmic interplay of student motivation and cognition in the college classroom. In M. L. Maehr, & C. Ames（Eds.） *Advances in Motivation and Achievement*, Vol. 8, 139-189. JAI Press Inc.

Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancy for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.

Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2000）Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.

桜井茂男1995「無気力」の教育社会心理学　ー無気力の発生するメカニズムを探るー　風間書房

Seligman, M. E. P. 1975 *Helplessness　ーOn depression, development, and death*ー. Freeman.（セリグマン　平井久・木村駿（訳）1985 うつ病の行動学　誠信書房）

下坂　剛 2001　青年期の各学校段階における無気力感の検討　教育心理学研究, **49**, 305-313.

下山晴彦 1995a　男子大学生の無気力の研究　教育心理学研究, **43**, 145－155.

下山晴彦 1995b　スチューデント・アパシーの構造の研究ーモデル構成現場心理学の試みとしてー　心理臨床学研究, **13**, 252－265.

下山晴彦　1996　スチューデント・アパシー研究の展望　教育心理学研究, **44**, 350-363.

Skinner, E. A., Caapman, M., & Baltes, P.（1988） Control, means-ends, and agency beliefs: A new conceptualization and its measurements during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 117-133..

高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程　ー比較文化的・横断的資料による実証的検討ー　教育心理学研究, **47**, 480-489.

高比良美詠子 1998 拡張版ホープレスネス尺度（日本語版）の作成に関する研究　お茶の水女子大学人間文化研究科「人間文化研究年」, **21**, 254-260.

高山草二 2001　学習動機における相互独立性・相互協調性の影響　島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）**35**, 1-8.

鉄島清毅 1993　大学生のアパシー傾向に関する研究ー関連する諸要因の検討ー　教育心理学研究, **41**, 200－208.

土川隆史 1990（編）スチューデント・アパシー　同朋舎

Walters, P. A. J. 1961 Student Apathy. B. Jr .Blaine. & C. C. McArtur,（Eds.） *Emotional Problem of the Student*. Appleton・Century・Crofts. 笠原嘉, 岡本重慶（訳〉1975　学生のアパシー　石井完一郎他（監訳）学生の情緒問題　文光堂Pp. 106－120.

Wigfield, A., & Eccles, J. S. 2000 Expecancy-value theory of achievement motivation. *Contemporary Educational Psychology*, **25**, 68-81.